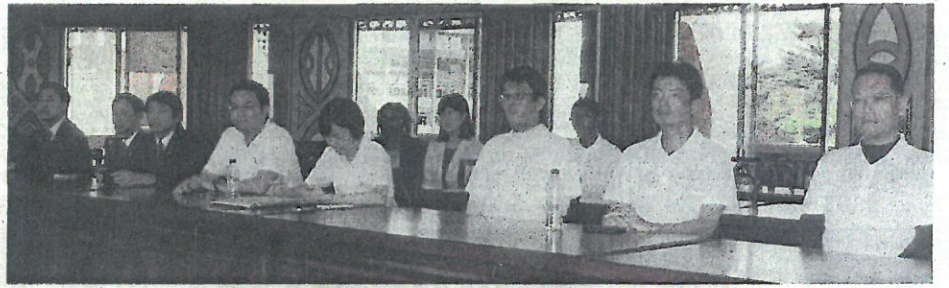




聴けば はまるん♪ **OBSラジオ**
 AM 大分・湯布院109.8kHz 佐伯126.9kHz
 中津・日田・竹田155.7kHz ワイドFM93.3MHz



緊張した面持ちで記念式典に出席した県関係者

カメルーン^の風

JICA同行記

◇ 2 ◇

「外出先では我慢」

同社によると、人口約240万人のヤウンデ市内には公衆トイレが7カ所しかない。全てくみ取り式で有料。1回につき50〜100セーファード(10〜20円)が必要で、汚れているため利用者はほとんどない。

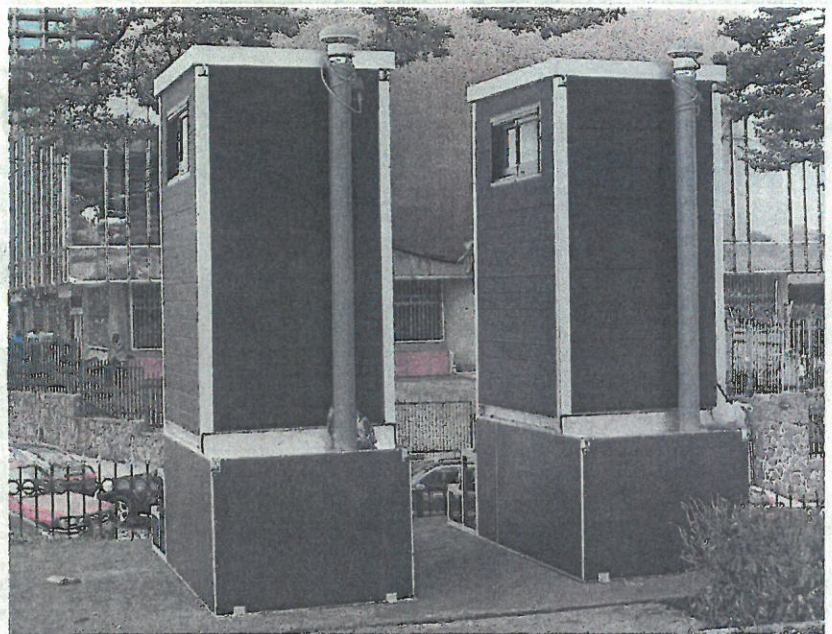
11月14日のカメルーンは快晴だった。首都のヤウンデ市庁舎。ベンチャー企業「TMT Japan」(大分市原山)のメンバー3人は、緊張した面持ちでバイオトイレ設置の記念式典に臨んだ。不衛生な状態を象徴するかのよう、現地滞在中、起業から5年。横山朋樹屋外のいろんな場所で男性

バイオトイレ 粘りの交渉

延べ20回以上現地へ

代表(46)はマイクの前に立つと、出席した約50人の両国関係者にあいさつした。「第一歩を踏み出せた。今日がスタートです」

臭い出ず、水は不要。同社は大分から計16台のバイオトイレを運び込んだ。木のチップと微生物の力で排せつ物を分解し、臭いは出ない。水は不用だ。日本での販売価格は1台約250万円。JICA(国際協力機構)九州の中小企業海外展開支援事業費を活用し、市庁舎と市関連施設に各4台、国立ヤウンデ第1大学(同市)に8台を設置した。手続きは順調だったわけではない。調査を始めた2015年6月以降、横山代表や永井正章さん(45)、三笠天志さん(38)いずれも大分市IIが延べ計20回以上、渡航を繰り返した。ヤウンデ市長に直談判に動きだしている。



ヤウンデ市庁舎前の広場に設置したバイオトイレ



既に「次の一手」へ
 和やかな雰囲気の中、記念式典は終わった。「わが街に設置してくれて感謝している」「自然と調和したデザインが近代的だ。素晴らしい」。喜ぶ市民の横で、横山代表は表情を引き締めた。バイオトイレが現地の習慣として受け入れられるかどうか。人々の暮らしになじむには、恐らく時間がかかるだろう。

今後どのように現地で生産し、ビジネスに結び付けるか。原料のアルミや木材の地元業者を視察するなど、既に同社は「次の一手」